ふるさとの民話　（第十三話）

『妙剱の三つの石』

千野に「妙剱」というところあり、「妙剱」の前の道のそばに、三つの石が置いてあります。この石には、不思議なお話があります。

ある夜、旅の坊さんが、「妙剱」の前の道を通った。火が燃えているので、近寄ってみると、鬼たちが、大きな釜を焚きながら、「まもなく、ここに若い娘が通る。その娘をつかまえて、この釜の中にいれてやろう。」と話し合っていました。

旅の坊さんは、そのまま「妙剱」を通り過ぎて、七尾の方へ向かって、しばらく歩いていきました。すると、向こうから、若い娘が、泣きながら歩いてきました。旅の坊さんは、娘に「どこから、来たのか。どうして、泣いているのか。」と尋ねました。娘は、「わたしは、七尾の山岸の娘です。この道をまっすぐ歩いて行くように言われましたが、夜道がこわいので、泣いているのです。」と答えました。

旅の坊さんは、この先に、鬼たちが待っていることは知らせず、「これからは、横を向かないで、ただ念仏を唱えながら、まっすぐ歩きなさい。」といって、自分の輪袈裟（わげさ）を、娘に掛けてやりました。

旅の坊さんは、若い娘と別れてから、七尾の町へやってくると、山岸の家の前に、人がたくさん集まっていました。近寄ってみると、葬式がはじまっていました。町の人たちは、「この家の娘さんが、急に亡くなったので、みんなで葬式をしているところです。」と教えてくれました。

旅の坊さんは、さっき千野の「妙剱」で会った娘のことを思い出し、家の人に「少し、気になることがあるので、お棺の中を見せて下さい。」といって、お棺の蓋を開けてみました。中に入っているのは、確かに、さっき道で会った娘で、旅の坊さんが掛けてやった輪袈裟をそのままつけていました。

その夜、娘を待ち伏せしていた鬼たちは、娘の念仏の声を聞いて、心を改め、三体の仏様に鳴ったということです。鬼たちがいた場所には、三つの石が置いてあり、その石は、みんな仏様で、「勢子菩薩、阿弥陀菩薩、観音菩薩」であるといわれています。

（飯川町　　片岡　めいの）

→